
—君を愛す—

AGEHA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

―君を愛す―

【Nコード】

N2703N

【作者名】

AGEH A

【あらすじ】

魔法学校へ連れられてきた真っ直ぐで馬鹿な人間、理衣とクールで本当は魔法の天才かも！？な、昂との能天気な学園物語となる予定だったものが、裏魔界の誰も超える事の出来ない魔力を持つ魔法師によって崩される――！？ 魔法師に追われ追い、死ぬ覚悟で立ち向かう男女の物語。※戦闘時々アリ、恋愛アリなドタバタコメディー♪※

☆8月21日 Vol.2 更新☆

Vol. 1

「……つまらない」

燦々と輝く太陽、耳が痛くなる程の蝉の鳴き声、
……全てが、煩い。

——ここが人間界。

ここから……人間を一人見つけて、連れて帰るのが僕の使命。

「誰にしようかな……」

そんな事を考えながら屋上の崖っぷちに座っていると、下の方から一つの声が聴こえた。

女の……声。

「ダメ——！！！！！！ 早まっちゃダメ——！！」

え、コレ明らかに僕に言ってるよね？ 後ろに誰か居るのではないかと周りをキョロキョロと見渡す。
うん、確かに彼女は自分を見据えている。

その時の顔はとても間抜けだっただろう。だって僕は人間には見えない筈だから。

何故この時彼女には僕が見えたのだろう。——それは今でも不思議に思う事だ。

「あ！ ちょっと待ってくださいね！？ 今から行きますから！」

そう言って彼女は、階段の音をダダダ……と鳴らしながら僕の目の前まで来た。

「もうっ何してるんですか！ 命は大切にしないといけないんですよ!？」

はあはあと、息を切らしながら彼女はそう言う。

でも僕は決して命を粗末にしようとした訳では無い。人間をここから探していただけ。

「なに？ 自殺してるとでも思ったの？」

少し笑いを含めながら言う彼女は、ち、違うんですか!？
と言いながら、熟れた林檎の様に真っ赤になった。

「丁度良かった」

彼女でいいや。

そう、今考えても彼女を選んだのは、ただの気まぐれでしかない。
別にブスでも美人でも良かったし、特に僕には関係の無い事だったからどうでも良かった。

誰に話しかけられたとしたって迷わず“丁度居た人間”を彼女の様を選んでいた。

『ただの道具に過ぎないのだから』

……そう、思っていた筈なのに。

＊

彼女と出逢ってからもう一月が経つ。

「あああ!？」

今日もこの学校で響く声。

彼女は僕が連れ出した人間界から来た女の子。

ここでは『理衣』と呼ばれている。

つと自分の紹介より先に紹介してしまったんだけど、僕の名前は

「昂っ！」

……はい、勝手に言われちゃいましたが彼女が言った通り僕の名前は『昂』。

この学校では元からあった名字は無くなってしまおう。

「昂ってば！ 何してんの！ 爆発しちゃったじゃん！」

爆発？ 何の？ って感じでしょうがコレは立派な授業。

——花を咲かせる魔法の練習だ。

「どーでもいいじゃん、怪我してないんだから」

いけしゃあしゃあと言うと、彼女は顔を真っ赤にして怒る。

「……ッなんで花を咲かす魔法で爆発すんの!？」

「さあ？ 僕が下手だからじゃない？」

……本当は出来るけどね。

やりたくないからやらない。だって優秀だとあの場所へ行かないといけなくなるから。

「……だって昂、本気じゃないでしょ」

凶星を突かれ、思わず反射的にビクっとなる。

彼女は意外に勘が鋭い。普段馬鹿そうに見えながらもその洞察力は完璧だ。

「どうして本気でしようとしなの？ 助けたくないの？」

「……助けたくなんかない」

もしも目一つけられたりしたら、と考えるとまっぴら御免。死ぬ確率だって98%という高さなのに。

「あたしは……助けたい。この国を守りたい」

っは、そんな綺麗事。って彼女じゃなかったら真っ先に思うだろう。

———だけど彼女だから、理衣だから思わないんだ。綺麗事なんて。

彼女ならこの世界に光を翳してくれる様な気がして。

彼女なら僕もこの学校の人も変えてくれる様な気がして。

こんな真っ直ぐで前だけしか見ないアホな女、絶対有り得ない。
———そう分かってるのに、僕は彼女の真っ直ぐな瞳に恋をし
てしまったんだ。

＊

どうしてこんなに好きになってしまったんだろうって

どうしてこんなに愛しいんだろう

って

自分でも馬鹿みたいに思えてくるけどやっぱり君が好きで
見ると瞳を細めてしまう位に眩しい君の事が凄く愛しくて

どうしようもなく君しか見えないんだ

守りたい、全力で

他のものを守ろうとしている君のことを

そう思ってた言葉

『……理衣が役に立つ訳ないじゃん』

傷ついた力オなんて見たくなかったけれど
涙溜めて震える声なんて聴きたくもなかったけれど

それでもやっぱり

『理衣にはこの国なんて……守れない』

その時の僕にはこう言う事しかできなかったんだ

＊

「朝だよー起きろー昂っ」

今日も朝から騒がしい声が耳元で響く。

うるさい、せつかくいい気持ちで寝てるっつーのに。

「……ん——……っせえ」

「? なんて言った?」

理衣には聞こえなかった様だ。

でも僕だって答えるのがダルイ。

「……昂ッ!!!! いい加減にしないと——」

そう言いかける彼女の後ろ首を持って思いつきり引っ張る。

ここでキス————が本来なんだが……あ、変な意味じゃないよ

？　ただ単に『黙らせる方法』としてってこと。

しかし僕は寝ぼけているので、いつも口唇を外し頭突きしたり鼻にキスしてたりする。

今日も

「いっだああああ　ゝ！！！！！」

彼女の頭にタンコブが出来たりする。

———そんなこんなな僕の日常ですが、今日は少しだけ……気まずい。

こうやって朝は起こしに来たが、彼女もそんな空気を放ってる。朝ご飯中に会話が無いのは今回初めての事態。相当怒っているんだろう。

僕の単なる被害妄想だったらしいのだが、コレばかりはどうしようも無い。

だって昨日あんな事を言ったのだから———

「……昂」

きた。

僕は下の方にあった視線を彼女に向けた。

だが相変わらず彼女は長い睫毛を伏せ、紅茶をすすりながら瞳を合わせようとしない。

「あたし、昂が行かなくても行くよ」

そう言って彼女は視線を上げた。
真剣な瞳、真剣な口調。

『何が』なんて聞かなくても分かった。
本気だって事も聞かなくて分かった。
——裏魔界の代表ベリアル的事だ。

ベリアルとは大昔に、この表の魔界を潰した裏の魔界の魔法師であって、誰も超える事の出来ない魔力を持った人物。過去ソイツに立ち向かった人物は、殆どが亡くなったという話を聞く。死ぬ確率98%、つまり生きて帰って来れる確率は残り2%————

「……駄目だッ！」

条件反射で僕は叫んだ。

その声は震えていただろう。

「……大丈夫だもん、あたしは死なないよ？」

「分かってない！ 理衣は何にも分かってない！！ アイツの恐ろしさを——」

瞳を逸らさずに真っ直ぐに言った。僕がこんなに真剣になる事はカナリ珍しい。

彼女は少し戸惑った様にして俯いた。

「……分かってるも「じゃー僕だって行く！」

言った後にハッとしながら手で口を塞ぐ。

自分が何と言ったのか理解も出来ずに、ただただ目を見開きなが

ら彼女を見つめる。

……僕、今なんて——

途端に彼女の曇った表情は消え、パアッと明るくなる。

「……だよね！ あたし昂の事信じてた！ これから一緒に魔法の強化に向けて頑張ろうッ」

彼女は嬉しそうに、満面の笑みで僕の両手を握った。

「っえ！ っや違っ……さっきのはっ言葉のあやで——」 「え……嘘だったの？」

そう言いながら彼女は僕を見上げ、潤んだ瞳で見てきた。

……うゝっ

僕は知らなかった。……彼女がこの時笑みを浮かべている事を。

「……——っイヤ、てか、その「ハイ決定ー♪」

………は？ 決定なんの？

彼女と僕が裏魔界に行く事の？

………

「なら明日は早起きだよー？ 気合い入ってるだろーから自分で起きれるだろうけど♪」

……ノッ……NO——!!!!!!!!!!

僕はそのような理由で戦う事となり、彼女にとことん振り回される人生を送る事となる。

Vol?1 (後書き)

はい、AGEH Aです！ 新作ですね！

魔法学校の学園ストーリーですが戦闘？も入ってくるかも？

戦闘とか書いた事ないんでまだ何とも言えませんがW笑

何か出して欲しい魔法とか呪文、リクエストあったら気軽に言っ
て下さい！

尚、魔法や呪文についてはドイツ語にする予定なので『どんな言葉
で唱えて欲しいか』をなるべくドイツ語で書いて頂くと助かります
！（ドイツ語が分からない場合、短い日本語の言葉でお願いしま
す）

誤字、脱字等ありましたら、感想で報告宜しくお願い致します。
それと評価、感想、お気に入り登録、レビュー等心よりお待ちしております
おりますm (m

Vol.2

悪夢を見た。理衣カンジョと裏魔界へ行く約束をする夢。

夢じゃないって？ いや夢だろ。……だって、僕と彼女がベリアルと戦う？

はっ、到底無理な話だ。勝てる可能性なんて0に近いんじゃないだろうか。

……

悪夢だ。絶対！ 悪夢だ。

今現在起きてるけど、あれはきつと僕の夢にしか過ぎな——

「ぎゃあああああ！」

僕は後方に倒れそうになりながら叫び、一点を指差した。

すると指した方から『え？』と、やや間抜けな声が聞こえる。

「り、理衣いつからそこに……っ」

「ちよっとそれ！ レディーに対して失礼なんじゃない！？ さっきから居たけど！」

イヤ別にレディーに対してじゃなくても失礼な事と思うんだけど

——ってこんな事言ったらまた話がややこしくなるからやめた。彼女は頬っぺたを最大限に膨らましながらそっぽを向く。

そして、急に振り向き意気揚々に言った。

「……よしッ！ ————今日から魔法の強化に向けて頑張ろうね！」

.....

「はい、サヨナラ」

「.....ちよっおつと待てい！ 昨日約束したでしょ！？ 一緒に行くって」

神様と読者様.....

疑ってゴメンナサイ。やっぱり悪夢では無かった様です。
放心状態になった僕の腕を掴んで彼女が早速引き摺り込んだ場所は、魔法学校の敷地内の図書館。

「.....ってなんで図書館？」

僕は寝不足で欠伸を続けながら、あっけらかんと聞く。

「ばか！ ベリアルについての本を探す為に決まってるでしょ」

ベリアルについての本？ そんなもんあるんだろうか。
タダでさえ死人が出て拉致された人が出て、もう手出ししないと決められた裏魔界なのに。

.....まあ取り敢えず話を合わせてついていけばいいか。
無いだろうけど。

——

——

「.....」

……ありましたよ。というかなんで？
引き攣った表情で本棚にある古びた一冊の本を眺める。

「あった？」

「っわあ！」

本棚越しに顔をニユッと出す理衣。
思わず驚いてしまった。

「どれどれ、えーっと？　ダイ　ワっ？　な、なんて書いてあんのコレえっ」

「『Die Wahrheit der R?ckenwelt
von Satan』ドイツ語で書いてあんなコレ……日本語に訳
すると『裏魔界の真相』」

「……」

「理衣？　どうした？」

彼女は小刻みに震えてる。

コレはヤバイ。何か知らないけど激しくヤバいんじゃないか。

泣いてる？　イヤ、それとも何か病気とか？　風邪？　……もし
くは寒い？

「理衣！！　どうし————　「すごい！！！！！」」

「……は？」

「ドイツ語なんて読めて翻訳まで出来るなんて知らなかった！　や
ればできるんじゃない！　昂っ！」

「——え、そっそうかな？」

普段褒めたりしない彼女に褒められると何となく、くすぐったい。
……それに褒められて悪い気はしない。

ちよつと顔を赤らめながら照れた素振りを見せると彼女は再び満面の笑みを浮かべた。

「うん！ 凄い凄い、ハイッ！ じゃあこの本、翻訳して読んどいてね」

「……は！？ ていうか理衣も魔法の時ドイツ語使うだろッ！！」
「アレはしょーがないじゃーんっ！ 言われた通りに唱えてるだけだし？ ……ならまたね！」

そう言って虚しくも理衣はサッサと魔法で消えてしまった。

……虚しい。

途轍もなく虚しい！

静まった図書室の中、時計の音だけが鳴り響く。
まだ朝早いから、誰も図書室へは来ていない。

………

……しようがない。気にならない事も無いし読んでみるか――――

――――『タイトルEin Titel…うらまかいのDie Wahrheit der
しんそう?ckneweltvonSatan
サクシヤEin Autor…Ichbinvermi?t』

見るからにして怪しいな……僕は恐る恐るとページを捲り、目次を開く。

まずはベリアルについてザッと知りたいから……っと

あつた……！

『超えられる事の無い魔力者ベリアル』
187ページ。

……あれ？

あれ、マジで何？

「……………っ！」

——開かねえっ……！

もう一度踏ん張って両手に力を込める。

が、やっぱり開かない。……意味が分からない。

何でこのページだけ開かないんだ？

何で——

！

なんだコレ……

僕が丁度持っていた所からイキナリ赤い文字が浮かび上がった。

＊

——ボタンッ——

「理衣っ！」

ドアを勢いよく開け、大声で彼女を呼ぶと彼女は飲んでいた水を思いつき吹き出した。

「な、な、なに……／＼／＼」

吹き出した事を恥ずかしがっているのか彼女は頬を浅いピンク色に染め、ハンカチで口元を拭いながら言った。僕が口をパクパクさせながら言葉に詰まっていると彼女は何か勘づいた様にして手の平にもう片方の手でポンツと音を立てた。

「分かった！ ……ごめんごめーん。つい……」

彼女は頭の後ろに手を回しながら首を傾ける。

「は？」

「アンパンの事でしょ？ もうお腹空き過ぎちゃって餓死しそうだったのー」

ドゴンツと僕は彼女の頭に拳骨を食らわせた。

彼女は『そんなに怒ること無いじゃーん……』と言いながら頭を押さえている。

「ちゃんと同じアンパンを買うからッねっ？」

「うんうん、同じアンパンを———じゃなくてッ！ そんなんどーでもいいんじゃないー！！！！ ふざけんなー！！！！」

「ギャ————!!!!!!」

僕はちゃぶ台をひっくり返しながらかんだ。

あれ、キャラ変わってる？　そこは気にしないで？

ブルブルと震える彼女を前にしながら僕は盛大な溜息をついた。

「……だから、ベリアル的事についてだよ」

そう一言言くと彼女はそれまでのふざけた顔では無く真剣な顔つきに変わった。

それを確認し、僕は話を続ける。

「ベリアルの本が見つかっただろ？　あの後ベリアルについて載っている所を開こうとしたけど——開かなかったんだ」

「……それってどういう意味？」

「落ち着け。まずは僕の話聞いて。……それは僕にも分からないんだ。開こうと精一杯力を込めてもこのページが開く事は無かった。——で、浮き出てきたのがこの赤い文字……これ……理衣はどう思う？」

彼女の顔を覗き込みながら尋ねる。

「あ……」

「！　なんか分かった？　理衣」

「コレ……何て書いてあるの？」

……

——ああ、こいつはこういう奴だった。

ドイツ語で書いてあるんだ。そりゃ分からなくて当然の事だ。
もう一度小さく溜息をつく僕を不安げに彼女は見つめる。

「—————『鍵を探せ。その鍵を見つけ、呪文を唱えればこの
ページを開く事が出来るであろう』って書いてあんの」

「鍵————？ そんなの何処にあるの？」

「それが分からないから今、こうやって理衣にも相談してるんだ。
理衣、なんか知っていたりしないか？」

少し眉を下げて赤い文字を見つめたままの彼女に問う。

「ごめんけど……あたしにも分かんない……」

多分分からないとは思っていたけれど、たった一粒の希望がプツリ
と消えた様な気がした。

落胆せざるを得ず、その場にペタリと座り込む。

「……どうしようか……」

暫くの沈黙。

イヤ、マジでどうしよう……

僕にも理衣も分からない鍵をどうやって手掛かり無しに見つける事
なんて出来る？

「！ そうだ！ 先生に聞けばいいんじゃない？」

「理衣って前から思ってたけど本気で馬鹿なの？ ベリアルに関わ
る事を手助けなんて教師がする筈無いじゃん」

刺々しくそう言うと彼女は肩をがっくりと落とす。

「そ……か……」

そう呟く彼女を横目で見ながら僕は意気揚々と声をあげた。

「悩んでもしょうがない！ 鍵について何か書いてあるものを今夜探しに行こう」

「探しに行くって……何処に？」

「……もちろん、図書館に」

Vol.2 (後書き)

評価、感想、お気に入り登録、レビュー等心よりお待ちしております！

それと魔法&呪文のリクエストについては攻撃呪文は日本語で、守備呪文や瞬間移動についてはドイツ語にしようかな、と思い始めました↑

変な設定ですね、しかもネタバレになっちゃいますね↑
すみませんw

という事で攻撃呪文は少し長めの日本語でもいいです。

守備呪文や瞬間移動は出来たらドイツ語でリクして頂くと嬉しいです(〃。▽。〃)！

ドイツ語の翻訳はググって『ドイツ語翻訳 — Infoseek マルチ翻訳』という所がオススメです！

めんどくせえ、という方は短めの日本語でリクお願い致します(守備、瞬間移動については)m()m

現在追加更新している途中です。

変な所で切れちゃっていますが気にしないで下さい……w

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2703n/>

—君を愛す—

2010年10月10日14時35分発行